

山川健一

鏡の中のガラスの船



鏡の中のガラスの船

山川健

鏡の中のガラスの船

昭和五十六年三月二十日 第一刷発行

昭和五十六年四月二十三日 第二刷発行

著者——山川健一

© Kenichi Yamakawa 1981, Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三二三 郵便番号二三 電話東京〇三—四三—二三（大代表） 振替東京—三六〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——二二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

鏡の中のガラスの船

5

湖に墜ちた流星

145

あとがき

236

初出掲載誌

238

装帧
秋山法子

鏡
の
中
の
ガ
ラ
ス
の
船

鏡
の
中
の
ガ
ラ
ス
の
船

時折コースは変わるかもしれないが

川は何時でも海に流れつく

行方を見失った今 おまえと俺とのためのひとつの夢を築こう――

ジミー・ペイジ

一

へ海へ流れる川へ

夕暮れの風は冷たかった。僕は遊園地のベンチから立ち上がり、これから始まる濃密な時間をどう過ごすか、と考えてみる。長い間夜行型の生活が続いたので、陽が沈むのを見るとようやく自分の時間が始まるのを感じることができた。陽はまだ高かったが、それでも光が透明でなくなり、微かに朱色に染まって来たことで、もうすぐ夜がやって来ることが判った。

夕方部屋を出て、そして何処か落ち着いて音楽を聴きながら酒の飲める場所を探して歩き回る、そんな毎日が好きだった。もっとも、夏の終りまではテレビ局の録画のセットを作るバイト

が週に四日あったので、それ以外の日に限られていたわけだが――。

そんな生活を、かなり長い間続けていた。新しい酒場と、音楽と、そして顔馴染みの友人を探して街を歩き回る、そんな習慣が守られなくなったのは、律子が郷里に帰ってしまったからなのだろう。そう思いたくはなかったが、夕方になっても僕の外に誰も部屋に居ないということは、やはり奇妙な感じだった。そういうわけで、僕は昼間のまだ暖かいうちは遊園地で読書するという新しい生活のパターンを身につけねばならなかったというわけだ。

僕は自分がヘトレインへ向かって歩いていることにふと気づき、苦笑する。以前からの習慣で守られているのは、ヘトレインで酒を飲む、ということだけだった。しかし、僕の友人達はどう殆どヘトレインへは顔を見せなくなっていた。ブラジルへ渡ったり、弁護士になるための勉強を始めたたり、それに息子が生まれて出歩けなくなったり――そんな連中が多かったのである。

銀杏の並木の下に黒塗りの木製の扉があって、横文字で白く TRAIN と染め抜かれている。扉の向こう側には階段があって、それは地下に続いている。

かなり大きな音でジャズが流されているので、耳が慣れるまでには少しばかりの間が必要だった。

カウンターに坐って、ウィスキーを注文する。

ヘトレインでも、七〇年頃はロックの新譜が流されていたものだった。キング・クリムゾンを

初めて聴いたのもこの店だった。音の洪水の中で、僕は自らが開かれて行くのを感じることができた。ロックは、七〇年という奇妙な時代の、何かが滅んで行く時の華やかさに最もフィットした音楽だったのだろう。僕らは自分の心の一番深い処を打って去る音律に酔い、丁度同じ頃、僕らと同じように長髪でジーンズ姿の連中がヘルメットを被って街頭を行進していた。律子も、そんな学生の一人だったのだ――。

何時の間にか、そんな祭りは終わってしまった。僕らに残されたのは深い混乱だけだった。ヘト・レインでロックを聴くことはできなくなってしまった。都内のロック喫茶は、その殆どが店じまいするか、或いはジャズ喫茶やディスコに変わってしまった。

薄暗い部屋の中で、二十人程の客が小刻みに軀を動かしながらジャズに聴き入っている。僕はジャズのおっとりした包容力も好きだったが、それでも酒を飲んでいると、無性に、激しいギターのリフを聴きたくなる。それは一種の病気みたいなものだった。

客の殆どはテーブル席に何人かまとまって坐っている。カウンターには三人程が腰掛けているだけだった。僕の隣りには長い巻きスカートのウェイトレスが坐っている。

「今日も遊園地なの？」

彼女が僕に声を掛ける。

「ああ」

「もう寒いでしょう。一日中何してるの？」

彼女は僕のグラスにウィスキーを足してくれる。

「本を読んでのさ」

「本？　へえ、えらいのね。でも、あなたが本を読んでるなんて、他に何もすることがなくなっただけという証拠ね」

彼女がそう言うと、横で聞いていたウェイターの良二が可笑しそうに笑った。

良二はカウンターの中で氷を割りながら僕に言う。

「ところで、例の病氣、治った？」

僕は苦笑し、肩を竦めてみせる。

「それが、駄目なんだ」

「まだ若いのに——」

僕は、グラスのウィスキーを一気に飲み乾した。

「この店がまたロック専門になったら、きっと治ると思うんだけどね」

「そりゃちょっと無理だな、マスターの方針でね。ロックは、客層が悪いんだよ」

ウェイトレスに、水割りのおかわりを頼んだ。

「その子と試してみたら？　きっと上手いくよ」

良二はウェイトレスを顎でしゃくってそう言った。彼女は良二を軽く睨む。

「また今度にするよ、どうも、駄目そうだから」

そう言うと、二人は朗らかに笑った。

ポケットに両手を突っ込んで、雑踏の中を歩く。僕には、人々が何を考えているのか、それが全く判らなくなってしまうていた。

彼らは一様に明るい表情をして、そのくせその明るさと同じ分量の陰悪さを内に秘めているような気がする——。あの頃も、七〇年の頃もそうだったろうか？ あの頃、人々は何かに憑かれたように熱っぽく、しかも誰もが心の虚しさを隠そうとはしなかった。勿論、あの時だって、何かが起こるなんて本当は誰も信じていなかったに違いない。むしろ、それは暗い時代と陰惨な事件の前兆でしかなかったのかもしれない。しかし、それでも尚、七〇年が僕らの時代の一つの頂点であったということは、殆ど直感的に感ずることができた。

凍える冬が始まったのは、あの時からだ。

あれから二年経った。そして、僕は自分が今だに深い混乱の中に居るのだという思いを拭い去れないでいる。

三年間にわたったロック・バンドの活動も、ギターリストの山村が南米へ発った時からやめてしまっていた。僕らの演奏を聴いたのは、あの長髪の闘士達だ。僕らは夜を徹して演奏し続けた。彼らは、一体何処へ行ってしまったのだろう——。

洋酒販売店の飾り窓のところまで来て、僕は立ち止まった。ウォッカとワインの中型の壺が、半透明な光を放っている。ブランドーやウィスキー、それに数々のリキュールやシャンパンが、透き通ったガラスの中で茶色や赤に輝いている。それは、寒々とした冬の街路に散らばるガラスの破片のように、冷たく煌めいていた。

海を思い出す。

記憶の底に様々な海があつて、ふと、それを思い出すことがある。穏やかな風の吹く青い海を思い出すこともあるが。それもやがて、何時ものあの黒い海に変わってしまう。鈍く光る油が浮いた、青黒い都会の海。コンクリートの岸壁や、木造の古い倉庫の脇で重たくうねっている、銀色の海。それは、静かに月の光を照り返しながら、暗い夜の中を水平線の向こうにまで続いている。

街路を歩きながら、ふと振り返ると、何時でも背後にそんな暗澹とした海が広がっているような気がしてならなかった。髪が揺れ、暖かい汗の匂いがする。そして、僕は見る。後ろに広がる漆黒の闇、暗澹とした海を――。海は、うねりながら僕を呑み込もうとするが、その瞬間、像の焦点は深い闇の中でぼやけてしまう。海は、消える。

洋酒の飾り窓を見て、僕はそれが冬の海に降る星のようだ、と思った。それに、闇の中で発光する深海魚のようでもある。そして、それらは僕の胸の中にある何かに、どこか似通っているような気がした。

水色のワン・ピースに白いエプロン、という制服を着た若い売りが、何か御用ですか、といったふうに微笑みながらこちらにやって来る。

「アップル・ワインはありませんか？」

と、僕は思わず訊いてしまう。

「できたら国産品がいいんですけれど」

女の子は少し考え、そして言った。

「ちょっとお待ち下さい。訊いて来ますから」

売りが店の中に姿を消すと、僕は慌てて洋酒店の前を離れた。

コンクリートの敷石の上を歩く。車道のコール・タールに足を降ろした時、夏にこの通りを歩いた時にそれが太陽熱に溶けていたことを思い出す。柔らかな路面を歩くのは、妙に艶めかしかった。

街は、夕闇に包まれ始めていた。黒々としたビルのシルエットの向こうに、オレンジ色の弱々しい陽光が微かに見えていた。商店の照明はそれぞれ十分に明るく、街は昼間と同じ位明るいのだが、それでも街全体をすっぽり包んでしまう深い闇があるのだということに安心することができた。もし日本に白夜などというものがあつたら、本当にやりきれないだろう。そう思う。

何の目的もなく街を歩いていると、妙に様々なことを思い出してしまう。それが大方律子のこ

となので閉口してしまう。

律子は僕より二つばかり年上で、二十二だ。彼女は一年程僕の部屋に居て、九ヵ月前の或る日、突然出て行ってしまった。喧嘩したわけではないのだが、何となくそういうことになってしまった。律子は、もうすぐ今度は正式に齒科医大の大学院生と結婚すると、最近葉書にそう書いてきた。

空がどんより曇って来る。

札幌ラーメンのスタンドが目についた。腹がへっていたので、そこへ飛び込んだ。

カウンターばかりの細長い店である。そんなに広い店ではないが、客が僕一人だけなので、少し妙な気がした。

味噌ラーメンを注文して、新聞を眺める。

ヘパリ会談の南ベトナム臨時革命政府代表団スポークスマンは十五日、南ベトナム政府がキンジャーム大統領補佐官とレ・ドク・ト北ベトナム代表団特別顧問との秘密会談に加わることは「新たな問題を生ずる」として、これを拒否すると語った。また北ベトナム代表団も、この可能性を一笑に付した。

へあき子ちゃん